



Title	＜書評＞ 細谷幸子著『イスラームと慈善活動：イランにおける入浴介助ボランティアの語りから』
Author(s)	葛西, 賢太
Citation	宗教と社会貢献. 2011, 1(1), p. 125-128
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/20468
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

細谷幸子著

『イスラームと慈善活動—イランにおける入浴介助ボランティアの語りから—』

ナカニシヤ出版、2011年2月28日、A5判、198頁、5565円

葛西 賢太*

1. 困難は普遍的

タイトルと、著者の経歴を紹介することで、読者には、本書がどのようなものか、まず思い描いてもらえるのではないだろうか。細谷幸子氏は、東邦大学医学部看護学科で教鞭を執るが、看護師として大学病院に勤務された経験もある。東京大学大学院総合文化研究科博士課程修了、博士（学術）。そして、イランせきそん交流支援会というNPOの理事長も務める。「せきそん」とは「脊髄損傷」の意であり、イランにおける脊髄損傷の障害者の生活支援をしながら文化交流する会とのこと。

イランといえば、ペルシャ帝国の歴史や文化、ホメイニ師によるイラン・イスラーム革命、イラン・イラク戦争、シーア派の拠点などといった事柄が思い浮かぶ。イスラーム教国というだけで、多くの日本人にとっては、距離的にも文化的にも遠い、謎めいた異国となりがちである。

だが、本書の中からまず見えるのは、環境の違いはあれど、入浴介助をはじめとする、高齢者や障害者のケアに取り組む人々の姿である。石油による収入に国家経済が依存するイランでは、税源による公的資金からの福祉の充実よりも、イスラーム的な喜捨の普及による援助が重きをなす。弱者保護の宗教的意義を強く説くイスラーム教国ゆえに、世俗的なボランティアが経験する実践者の内発的なよろこびに加えて、善行や罪の見積もりや来世や、見守る存在としての神などとの関わりという要素が加わる。しかし、怪我や事故や病気や老化に伴うさまざまな障害から逃れられないことは、ところ変われど普遍的な困難である。イスラーム教国、とくにイランにおいて、障害者の福祉はどのようなものであるのかを、入浴介助ボランティアという事例への踏み込んだ調査を通して、読者はいかみまることができ

* 宗教情報センター研究員。ktkasai@nifty.com.

る。文章は読みやすく、ペルシャ語の宗教用語にも親近感を持てるはずだ。とくに医療や福祉の現場を知っている読者なら、ここでの話題は異国の話とはまったく思えないだろう。

2.目次と概要

目次の大要を一覧していただく。

第Ⅰ部 イランの社会福祉と慈善活動

第1章 はじめに

第2章 イランの福祉制度と慈善活動

第3章 社会福祉事業における慈善活動

第4章 キャフリーザク介護福祉施設の概要

第Ⅱ部 善行としての入浴介助

第5章 入浴介助ボランティアの活動

第6章 苦行としての入浴介助

第7章 罪の浄化と入浴介助

第8章 恩寵の循環空間

第9章 奇跡の共有

第10章 祝祭空間としての浴場

第11章 生と死の間で

第12章 まとめ

補足説明

読者はまず、調査の経緯や諸課題についてみることになる。ついで、イランの福祉制度が、1979年のイスラーム革命に先立つ時代の西欧化・近代化政策の中で抱えていたゆがみと、革命以後の国家福祉機構やエマーム・ホメイニー救済委員会などによって行われる公共事業の側面、そのいっぽうで、個人の信仰に動機づけられた喜捨やボランティアなどの慈善活動の側面によって構成されていることが説明される。国家福祉機構は日本円で160億円ほどの予算により日本の厚生労働省のような事業を行うが、うち、7%ほどが一般からの喜捨（イスラームで善行として推奨される寄付）によ

ってまかなわれている。エマーム・ホメイニー救援委員会は喜捨を貧困者に分配するための機関であり、34.5 億円ほどの寄付・供託金を得て生活困窮者などの救済事業に分配する（いずれも西暦 2000 年のデータ）。前述したように、税源に比べて喜捨の比率が高いことが興味深い。

著者が調査をしたのは、先進的なキャフリーザクという介護福祉施設である。これは、上記の分類では、公共事業ではなく民間の、事業と喜捨によって運営される民間機関となる。この施設での、汚物に触れることもある入浴介助ボランティアが、ヘジャーズで身を被うムスリム女性にとって体力を要することが示される。また、毎日の礼拝で汗その他の体液を洗い清めることをムスリムが重んじることを想起すると、体液や排泄物に触れるこのボランティアは、入所者のための縫い物などの汚れないボランティアに比べて、重さ・深さをもって受け止められていることが、語りの中から明らかになる。重い病気を信仰によって癒やされた返礼の語り、あるいはボランティアによって大きな問題の解決がかなうという噂を著者はとりあげ、イスラームという通奏低音が教条的ではなくいきいきとボランティアたちに受け止められている姿を描く。同時に著者は、床ずれを作らないための工夫や気遣い、対人関係の問題など、病棟にかかわるものならではの出来事が国を超えて普遍的に存在していることも確認する。

3. イスラーム世界における福祉と慈善

読者に注意を促したいのは、イスラーム世界における福祉と慈善のありかたである。イスラームは、弱者救済を重視する宗教である。相互扶助は日常的に、またイスラームの年中儀礼や祭礼のたびごとに行われている。だが、イスラームは単純な一枚岩構造をなすわけではない。近代的な福祉理念と、孤児でもあったムハンマドが重んじた弱者救済・相互扶助の理念とは、必ずしも重ならない部分もある。

革命後のイランでは、イスラームの理念を基盤とする公的活動が重んじられている。イランにおいてイスラーム的であるというのはしばしば政治的側面に直結する。しかし、本書で主に扱われるのは、むしろ私的な信仰と私的な善意である。善意と、介助が求められる現場と、信仰世界という三者が織り成す世界なのだ。その関わりに、イスラーム法学者の宗教令

（ファトワ）とその解釈が編み込まれる。つまり、イスラームという宗教による社会貢献という単純な図式ではなく、人々の善意や民間信仰的要素と、イスラーム、近代的な福祉や医療の理念が会う中に現れる、私的実践が、著者の研究対象であると思われる。

4. 多文化共存の時代におけるケアのありかた

イランでの調査手続きに加え、外国人で非ムスリムの著者が一つの慈善事業団体に参与観察をしたのは容易ではなかったはずだ。第一章にはそうした調査の経緯と彼女の判断が示される。対象となる団体の位置だけではなく、その宗教上の評価がどう受け止められるか分からないという難しさの一つ一つ克服して、学位論文にまとめ、さらに活字にした著者の労を多としたい。上記の経験から読者も大いに学ぶところがあるだろう。

多文化共存の時代に、宗教的な世界観は、ケアをされる側、する側の双方にかかわってくる。入浴介助という看護学にとって重要なテーマが、多元主義的な異文化共存の中に置かれたらどのようなになるのか、イランのイスラーム慈善活動という鏡を通して、読者に体験させる。巻末の「補足説明」（用語説明とした方がよりわかりやすいと思うが）は平易で、イランのシーア派イスラームにおける社会貢献に関心を持つ人はもちろん、ケアの多様な展開に関心を持つ医療者にも有益な、好著である。

参考文献

- 細谷幸子 2008 「現代イランにおける看護とイスラーム——女性看護師が男性患者のボディ・ケアをおこなう場面から」『イスラーム世界研究』2(1): 92-162。
(http://www.asafas.kyoto-u.ac.jp/kias/contents/pdf/kb2_1/10hosoya.pdf)
- 2001 「病院で『ヘジャーブ』をとるということ」『東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所通信』103: 1-6。
(<http://www.aa.tufs.ac.jp/book/tsuushin/newsletter103.pdf>)
- 2011 「イスラームと医療倫理——医療機関における異性間身体接触の是非をめぐって」(<http://www.circam.jp/columns/columns.html>)
- イランせきそん交流支援会ホームページ <http://www.iran-sekison.org/>